

植民地と近代、朝鮮 1930 年代：近代日本のカフェ文化（6）*

山路 勝彦**

大阪・道頓堀の美人座から出発した近代日本のカフェ文化論も、台湾、満洲を経て朝鮮にまで足を延ばしてきた。今までの足取りを振り返ってみよう。明治期に西欧の衝撃から近代化の道歩んだ日本は、大正・昭和期に至り、アメリカの大衆消費文化の影響を受け、新しい文化の創造に進む。その流れは、東アジアの植民地にまで影響を及ぼし、台湾、満洲に日本経由での西欧文化をもたらすという結果を生んだ。伝統文化との相克をはらみながら、これら植民地は大きく変動していった。朝鮮もその影響を受けた社会である。1930年代に朝鮮で展開していた新しい文化の波をここでも論じていくとしよう。

1 梶山季之と京城の光景

崔吉城の著作、『韓国民俗への招待』は、一般向けの書物として執筆された、多方面にわたる民俗の世界を簡潔に紹介した書物である。そのなかの一節として収録された「韓国の喫茶店“茶房”の文化人類学」では興味深い話題を提供していて、1960年代以降、アガシ（“女給”）がコーヒーを出前するサービス業が急速に普及した、と言う。さらに、この業種が登場する以前の朝鮮の歴史に遡ると、込み入った事情が語られている。李朝時代に儒教文化が普及する以前には「茶房」で茶を飲む習慣はあったが、その後は廃れ、日本統治時代になって今度は近代的なカフェが成立した、と崔吉城は説いている。正確に言えば、明治35（1902）年にドイツ系ロシア人によってホテル式の茶房が開かれ、1923年には近代的な喫茶店も出現した、と言う（崔吉城 1996: 102-103）。こ

の茶房のその後の歴史は不明だが、日本統治時代の 大正 4（1915）年に出版された『京城繁昌記』には、洋館のたたずまいをした「カフェータイガ」が営業を開始し、洋食やビールが供せられた、との記述を読むことができる（岡 1915: 461）。それは西欧的雰囲気を感じさせるカフェである。ところが、昭和の時代になると、カフェをめぐる状況は大きく様変わりしていく。

カフェの営業は大正期の新聞でも報道されていて、社会的に関心を集めていた事実は確認できる。当然ながら、朝鮮総督府の公安当局はその事実を認識していたはずである。しかしながら、カフェ、そして女給の就業数の統計を公表したのは昭和 8 年になってからで、公表するまでにかなりの時間が経っていた。その当時、特定業種については警察の許認可が必要であり、営業上の取締りは警察の任務とされていた。その取締りの職種は公文書、すなわち朝鮮総督府出版の年次刊行物、『朝鮮総督府統計年報』に記されている。それによると「鉄砲商」、「人力車営業」、「料理店」、「飲食店」、さらには「娼妓」、「貸座敷」などに対しても警察は許認可権も持っていた。カフェについては、昭和 8 年以前の段階では独立した項目として設定されず、「飲食店」の範疇に含まれていたにすぎなかった。もちろん警察がカフェの存在を知らなかったということではない。

ところが昭和 10 年になると、女給がメディアなどで頻繁に取り上げられる世相を受けて、警察のカフェに対する観方には明らかな変化が生まれてきた。公文書に、あらたに「カフェー及バー女給」という分類項目が登場してくるのである。この事実が意味することは重要で、カフェの社会的

*キーワード：近代、植民地朝鮮、ハリウッド映画、化粧品、社交ダンス、カフェ

**関西学院大学名誉教授

重要性を公安当局が無視できなくなったことを認めたことになる。しかも、当局がその実態を統計的に把握していたことから、その動向に神経を尖らせていたことを教えている。当時、カフェの流行が社会問題として世間の注目を集め、しかもカフェを舞台とした犯罪行為さえも多発していて、公安当局はその存在を無視することができなくなったという事情が、それにはあった。こうした背景が、カフェの統計的把握に繋がったはずであり、その時の公式統計については第1表に示しておいた(注1)。この表を基にカフェの実態を検討してみよう。昭和8年の段階では、カフェの経営者も女給も圧倒的に日本人が多数を占めていたが、昭和9年頃から朝鮮人経営者が増加し始め、カフェの女給については昭和16年には日本人を上回る勢いで増加していることが示されている。後で触れるが、昭和15年には奢侈を禁止する法律が実施され、世の中は急激に戦時体制に突入していったが、そうした雰囲気の中でカフェは人気のある社交空間として利用され続けていた。昭和10年代、カフェは朝鮮社会で急速に普及して

いったのであって、この傾向はすでに論じた台湾と同じである。もっと一般的に言えば、昭和10年代は東アジアでは、日本といわず植民地といわず、共通して見られる現象として大衆文化の成立が指摘できる。あるいは、植民地にまで波及した近代文化の世相をそこに読み込むことができる、と言い換えてもよい。

この昭和の時代を描いた小説に梶山季之の『京城昭和十一年』がある。主人公は新聞記者の阿久津であり、カフェや小料理店がひしめく繁華街の裏通りに新しくできたカフェ、「ミドリ」が舞台として設定されている。この地域のカフェの女給は白エプロン姿であったというから、大阪の流儀に沿ったものであろう。小説ではミドリのマダムの息子の友人に朝鮮独立運動に関わった人物がいて、マダムがその関係を内偵するよう阿久津に頼んだことから物語は始まる。その詳細は置いておくとして、この小説で描かれたカフェはいささか享楽的世界そのものである。例えば、小説の一節には「ジャズのレコードをかけ、客と女給がアメリカ式に飛び跳ねていた」という場面が描写され

第1表 カフェと女給数の変遷

	カフェー及バー				カフェー及バー女給			
	総数	内地人	朝鮮人	外国人	総数	内地人	朝鮮人	外国人
昭和8年	420	253	65	2	2,489	1,988	501	—
9年	535	424	106	5	3,070	2,331	739	—
10年	665	477	171	7	3,334	2,395	939	—
11年	637	453	181	3	4,060	2,661	1,399	—
12年	688	441	246	1	4,292	2,599	1,691	—
13年	639	415	223	1	4,257	2,522	1,773	2
14年	721	487	233	1	4,302	2,346	1,955	—
15年	609	341	267	1	4,371	2,226	2,145	—
16年	608	328	279	1	3,891	1,893	1,998	—
17年	802	304	460	38	3,872	1,644	2,277	1

朝鮮総督によるカフェや女給の統計が公表されたのは、昭和10年3月刊行『朝鮮総督府統計年報』からである。この年度から、カフェは「料理屋」「飲食店」の部類から独立し、「警察取締営業取締」の項目に括られて、公表されるようになった。

- 出典：朝鮮総督府編 1935『朝鮮総督府統計年報(昭和8年)』、京城：朝鮮総督府。
 ————— 1936『朝鮮総督府統計年報(昭和9年)』、京城：朝鮮総督府。
 ————— 1937『朝鮮総督府統計年報(昭和10年)』、京城：朝鮮総督府。
 ————— 1938『朝鮮総督府統計年報(昭和11年)』、京城：朝鮮総督府。
 ————— 1939『朝鮮総督府統計年報(昭和12年)』、京城：朝鮮総督府。
 ————— 1940『朝鮮総督府統計年報(昭和13年)』、京城：朝鮮総督府。
 ————— 1941『朝鮮総督府統計年報(昭和14年)』、京城：朝鮮総督府。
 ————— 1942『朝鮮総督府統計年報(昭和15年)』、京城：朝鮮総督府。
 ————— 1943『朝鮮総督府統計年報(昭和16年)』、京城：朝鮮総督府。
 ————— 1944『朝鮮総督府統計年報(昭和17年)』、京城：朝鮮総督府。

ている（梶山 1969: 11）。「アメリカ式に飛び跳ね」とは社交ダンスの場面を記述したものであろう。当時では、カフェで女給を相手に社交ダンスがしばしば行われていたが、風紀を乱すという理由で公安当局によって禁止されていて、その事実が発覚すると警察が踏み込んで検挙することがしばしばあった。物語では、阿久津は偶然にその場面に遭遇したことになる。こうした出来事は当時の京城の歓楽街に一般的に見られた光景であろう。以下の論述では、梶山の描いた世界のように、カフェが大衆社会に溶け込み、しかし他方で公安との確執が起った昭和の時代を記述する試みである。その作業を行うにあたって、あらかじめ前提になる時代背景を見ておきたい。言い換えると、そのカフェを支える基盤としての近代的な遊興施設が都市ではどのように整備されていったのか、論じておきたい。カフェ、そして女給という新しい職種を考えるためには、近代を取り巻く一般的環境の理解を深めておく必要があると思うからである。

2 近代の始まり、化粧品業界、断髪少女のことなど

1) 日本への憧れ

昭和の時代、朝鮮には多彩な近代文化が導入され出していた。その背景には、東京などの都市に花開いた新しい文明に憧れ、すすんで近代生活を体験しようと試みた人々の存在は大きく、なかでも朝鮮から日本へ向かう留学生の活躍は目覚ましかった。留学生による知識の習得の問題は白恵俊が議論している。それは、先端的文明を東京で学んだ留学生が、さまざまな「モダン」を身につけ、京城に持ち帰ったという議論である。その例証の一つとして、白恵俊は東京で評価を受けていたモダニズム文学を例証に挙げている。その結論として、白はこう言う。すなわち、「京城には存在しないものがある東京、それだけでも京城の人々にとって東京は、憧れの場所」であった、と（白恵俊 2006: 341）。近年では、東京や京都の帝国大学で学んだ留学生の活動を分析した鄭鐘賢の綿密な研究がある。その鄭鐘賢の議論は、エッカート

を伏線にしていることが明らかである。エッカートは植民地政府が紡績業を育成したため、それが戦後の韓国の経済発展に資したという理解をしている（エッカート、K. J. 〈小谷訳〉2004）。鄭鐘賢はさらに一歩進め、戦後韓国の近代化にエリートとしての留学生が果たした貢献を分析する。その鄭が行った研究とは、金季洙とその第二子、金相浹に焦点を当てた詳細な分析である。京都帝国大学に留学した金季洙は、そこでの留学体験を生かし、帰国後、繊維産業としての京城紡績を創設し、韓国を代表する企業にまで発展させた。その息子、金相浹は東京帝国大学法学部に学び、戦後は高麗大学長、さらには全斗煥大統領のもとで国務総理を歴任した。この親子は帝国大学卒という経歴を生かし、卒業生のネットワークを「社会資本」として活用するのに成功した例である（鄭鐘賢 2021: 31-37）。この研究で鄭が評価したのは、近代的な都市、東京に憧れて渡航し、大学で先端的知識を学び、帰国後はその成果をもとに韓国の近代化に貢献した金季洙と金相浹の実績である。

日本の大学で学んだ知識人への業績評価は、この二人、白と金との研究に通底している。しかし、それならば、留学経験のない一般人にとって近代文明はどう映っていたのであろうか。その一つの手がかりとして、洋装品、化粧品などの西欧由来の産物が日本を経由して浸透していった過程を考え、近代的な世界が植民地朝鮮に及ぼした影響を認識することから第一歩を踏み出してみよう。ここでの議論には二つの論点がある。第一は、日本製化粧品の効能を宣伝する広告の分析である。第二は、化粧品を使用するモデルの身体性であり、西欧女性に美の象徴を求めていた画像の意味を探る試みである。

2) 化粧と美の世界：レート、ウテナ、ヘチマコロン

戦前の日本の化粧品会社のなかでも、朝鮮に販路を拡大した企業は多く、平尾賛平商店（ブランド商品名：レート、以下レートと略称）はその代表格であった。そのほかにも、中山太陽堂（現：株式会社クラブコスメティクス、以下、略称としてクラブ）、ウテナ株式会社、伊藤胡蝶園、桃谷順天館、桃谷研究試験所、津村順天堂、小林商店

など、多数の有名会社や機関を数え上げることができる。これら企業や機関は西欧女性の身体的特性をイメージさせながら化粧品の宣伝をすることで、朝鮮社会に売り込みを試みていた。時には和風装束、あるいは朝鮮風俗も登場するが、それ以上に顕著に登場するのは洋装姿の女性のモデルであった(第1図)。ウテナの化粧品を見ると、パーマをかけた髪型はハイカラさを象徴し、加えて健康と美、そして清潔さを感じさせるという効能を際立たせ、身体美を表現することに特徴があ



第1図 絵葉書：レートの目指した女性像
作成はレートによる。

った(『東亜日報』昭和14年2月22日)(第2図)。ヘチマコロンの図象もまた魅力的であった。「恋愛の香り」を発散させ、「スマートさと清麗」を醸し出すという表現からは、すらりとした体型をした西洋女性への憧れを抱かせてしまうだろう(『東亜日報』昭和7年4月6日)。

ただし、現実の社会にこのような洋装の姿が市街に溢れ出ていたわけではない。韓国女性を登場



第3図 ヘチマコロンの新聞広告
ヘチマも洋風の図柄を多用していた。西欧風スタイルの女性を宣伝に使い、「ヘチマコロンは恋愛の香」と情緒に訴えている。
出典：『東亜日報』、昭和7年4月6日。



第2図 ウテナクリームの新新聞広告
パーマをかけた洋風スタイルの髪型。「見事な美肌作用を味わってください」と宣伝。
出典：『東亜日報』、昭和14年2月22日。



a)



b)



c)

第4図 絵葉書 モダンな妓生

洋装スタイルは新しいファッションとして妓生の世界にも生まれつつあった。それぞれの「表題」は以下の通り。

- a) 「歌劇に新生面を拓くモダンな妓生」
- b) 「モダン・レビューをも研鑽すべくその猛練習中」
- c) 「管弦楽に新手法を見せる妓生」

させた絵葉書には、伝統的なチマチョゴリを身に纏った女性が多く登場するが、洋装姿の絵葉書はめったに見られない。その理由として、絵葉書は観光客を購入対象者とした性格を持っているため、より強く伝統色、あるいはエキゾチックな側面を強調したかったためなのであろう。

これと同じく、日常生活のうえでの女性の洋装姿は画像上ではめったに登場しない。奇妙に思うかも知れないが、早くから洋装に挑んでいたのは、むしろ妓生たちであった。妓生のための訓育所では、新しい芸能の世界を開拓するためには妓生自体も変化する時代を意識していて、洋装という新しいスタイルにも挑戦する必要があった。第4図に見る絵葉書では、「歌劇に新生面を拓くモダンな妓生」、あるいは「モダン・レビューをも研鑽すべくその猛練習中」と説明されていて、モダンな要素を入れて新しい芸術を生み出そうとする努力がうかがわれる。さらに、エキゾチックな面よりも、近代性を表現する妓生がいたことも確認できる。観光案内書、『京城情緒』に見る妓生は、むしろ垢抜けした表情の顔立ちである(毛利1936: 挿入写真)(第5図)。

平壤の著名な妓生、金英月が洋装して化粧品会



第5図 モダンな妓生の顔写真

この写真を所収した観光案内本には京城の妓生、30余名が名前入りの写真付で紹介されている。和服が多く、次いで韓服が多いが、それ以外に洋装した2名の妓生が紹介されている。

出典：毛利1936: 23。



a)



b)

第6図 絵葉書「モダンな妓生」

- a) 金英月（プロマイド写真）は著名な平壤の妓生。ハンドバッグを左手にハイヒールを履いた姿態はまさにモダンである。
 - b) 金英月が登場する「美活石鹸」の新聞広告。
- 出典：『東亜日報』昭和2年11月22日。

社の新聞広告に登場した例もある（『東亜日報』、昭和2年11月22日）（第6図）。ハイヒールを履き、ハンドバッグを手にする立居姿は垢抜けしていて、原版のプロマイドと重ね合わせると、近代的女性のモデルとして画像に収められたようだ。こうしたモデルたちが市井の生活にどこまで影響を与えたのか、細部にわたっての検証に問題が残るとはいえ、時代の先端的な存在として脚光を浴びていた事実は無視できない。

ただし化粧品会社のモデルがすべて洋装姿であったわけではない。地元民への浸透を巧みに図った戦略を採用していた化粧品社もあって、レートはその一つであった。その特徴は、第一に、レー

トは伝統的朝鮮の服飾を身につけた女性を多用することで、他の化粧品会社と差異化を図っていた（第7図参照）。伝統を通して現地社会に親密性を訴える作戦は賢明な方法であったに違いない。基本的には美肌をつくるという効果が化粧品会社の第一の目的であるなら、着衣そのものの選択肢は多様であってよいのだが、第7図に見る登場人物は韓服を着て、髪型も伝統的なスタイルの女性であった。現地の風土に合わせた戦略を考えていたら、このレートの作戦は巧みであったと言わざるを得ない。実際のところ、現地社会に溶け込みながら注目を集め、他方で化粧品の効能についての謳い文句を強調していく作戦をレートは採用していた。「百合（ユリ、百合）のような香りと気品！柔らかく肌によく染み込んで化粧美とお肌の美しさを発揮する夏の美容商品」（『東亜日報』、昭和9年10月23日）と、新聞広告は巧みな言葉遣いで人心を掴もうとしていた。美白の肌への誘惑は、日本も朝鮮も同じであるが、自社の化粧品の効能をレートは強調していた。

新聞広告による製品の宣伝にもまして、レートの重要な戦術は、京城の繁華街に記念碑としての役割を持つ広告塔の建設であった（第8図）。一介の化粧品会社としては、この建設は大胆な印象を与えるが、他の政府関係の建造物と比べてみても、その輝いた威容は他を抜きんでていたことはレートの自慢であった。天高く聳えたつレートの光景は、まさに京城という都市のランドマークとしての役割を担っていて、「ここに日本のレートあり」と宣言しているようである。地方からの京城への訪問客は、他の総督府関連の施設より抜きん出て高いレートの広告塔を見上げて、その存在の大きさを脳裏に刻んだに違いない。この高塔こそは「日本」を身近な存在と意識させるのに貢献したと言ってよい。「白い肌の化粧品」を自認するレートは、同時に歩道から天を見上げるような存在としての「日本」を象徴していたことにもなる。

ウテナクリームやヘチマクリームなどの化粧品会社が西欧、あるいは近代的産品を意識させる宣伝に打って出ていたことは述べておいた。その点で両者は戦術が異なるかもしれないが、大切な点は、レートの高塔が日本の偉大さを意識させ、他



第7図 女性をモデルにしたレートの新聞広告

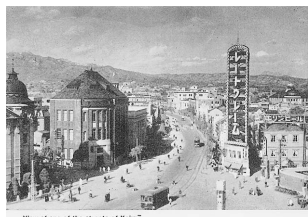
レートは朝鮮向けの宣伝には韓服の女性を登場させている図柄が多い。
 a) 「百合のような香りと気品」、「夏の強い陽射しにも日焼けしない」と宣伝。
 出典：『東亜日報』、昭和9年10月23日)。
 b) 「現代的で明쾌な化粧美」、「自然な個性美が發揮できる」と宣伝。
 出典：『東亜日報』、昭和9年3月8日)。

の化粧品会社もまた日本製品の上質性を説きつけることによって、相乗効果を生み出し、日本そのものを意識させたことにある。文明の発達した日本、高品質な日本の化粧品、これらを一括りの記号として把握するなら、近代的世界は日本から新しく導入されたという認識を作り出すのに成功するであろう。「日本」由来の製品なれど、「西欧」と「日本」とが奇妙に共鳴し合い、韓国社会のな

かに浸透していくという結果が生みだされたことになる。

3) レートの企業戦略

レート(平尾賛平商店)は戦後まもなく倒産したが、その活動を端的に示す資料はいくらか残されているので、レートの活動を整理しておくことは可能である。現在でこそ資生堂は化粧品業界で



a)



b)

第8図 レートの広告塔

a) 京城の繁華街に聳える威容は人目を惹きつける。

出典：稲川：1939。

b) 絵葉書「京城名所：京城郵便局ヨリ鐘路方面ヲ望ム」(レートの広告塔は絵葉書としても流通していた)。

世界的に有名なブランド商品を生み出しているが、戦前における資生堂の企業としての評価は二番手の位置でしかなく、化粧品業界の大手といえ、東(東京)のレートと西(大阪)のクラブと言われるほど、この両者は抜きん出た存在であった。クラブは企業内に研究所、正式名称では「中山文化研究所」を創設し、またファッション雑誌としての『女性』を発刊し、同時に一般社会に向けての啓蒙活動にも邁進していた実績もあり、新聞などに広告を出し、その知名度を上げる努力を片時も怠らなかつた。クラブの業務については、台湾での宣伝活動を簡略に紹介しておいた(山路2021b)。その目的は、台湾におけるクラブ化粧品の普及が台湾ファッション界の興隆におおいに貢献したことを確認するためであった。

さて、そのレートの歴史は古く遡る。その創業者は幕末の弘化3(1846)年、駿府(静岡県)で生まれた平尾賛平である。長じて三井組(三井物産)などで勤務に励んだ後、東京・神田で売薬業を営んだ平尾を成功へと導いたのは、化粧品製造業に取組んだ結果であった。小野小町と云えば、日本歴史上でもっとも有名な美人であるが、その名を冠した白粉(おしろい)、すなわち「おしろい小町水」を製造し、その普及に努めたことが平尾の功績であった。かくして、化粧品業界で名を高めた平尾は、その後も「ダイヤモンド歯磨」を

発売したりして、業界で不動の地位を築いていく(平尾太郎1929: 1-3)。不運にも平尾は若くして急死したが、その子息もまた父親譲りの卓越した才能を持ち合わせていた。二代目・賛平を襲名し、フランスに渡り、欧米化粧品業界を視察し、多くの成果をあげたのである。この二代目も特筆すべき業績を残して、優秀な技術者を雇い、牛乳の成分分析をさせ、その成果をもとに新しい化粧品を開発していった。その代表作は、明治39(1906)年に発売した「乳白化粧水・レート」である(角南1983: 44、平尾賛平〈二代目〉1931: 12)。この新製品には、フランス語にちなんだレート lait(牛乳)があてがわれ、その名称の斬新さも加わって、知名度を高め、舶来好みの日本人の間で爆発的人気を生み出していった。レートの目指す女性像は白い肌をした美人である。そのための商品開発として白粉(おしろい)、クリーム、石鹸、さらには香水や化粧水などを手がけ、その販売に力を注いできた。企業の社運を決したと言ってよいほどの成功を収めた人気の化粧品は、こうして流通していった。

二代目・平尾賛平の功績は国内ばかりではなく、海外にも販路を拡大していったことで評価される。明治38年には中国に赴いて代理店を立ち上げ、ダイヤモンド歯磨きの普及を図っているし、それ以後も大正期に至ると上海には総代理店

第9図 レートの商品 (図解)

出典:『レート通信』、第50号、昭和3年1月20日。

を置き、漢口、重慶、天津などにも出張所を設け、自社の製品、とりわけ歯磨きの普及に邁進した。販路拡大の努力は世界各地で試みられたが、朝鮮ではいっそうの熱を込めて宣伝に取り組んでいた。交通不便な山地にも社員を派遣し、試用品を各戸に配布したばかりか、「学校に於ては生徒学生に衛生講話を為す等専ら需要の喚起に努めた」(平尾太郎 1929: 582) というから、熱の入力は尋常ではなかった。化粧品の販路拡大にはメディア操作が欠かせない。そのため、新聞広告に多くの女性を登場させ、レート製品を使用することで東洋人の肌も西欧人のような美肌になれるというイメージ作りに取り組んでいた。先に示したレートの作成した画像 (第1図) を再び取り上げてみよう。西欧人を思わせる面長の顔立ち、モダンな髪型、白い歯をのぞかせ、口紅をつけて微笑みながら、白い肌を見せつけている女性、これこそがレートの目指す化粧品の世界の目標であった。他の化粧品会社もまた、西洋女性をモデルにして積極的に朝鮮で普及を図っていたが、この種の身体表象こそは日本の化粧品会社が植え付けた

ものであった。

さらに、レートは朝鮮で市場を獲得するため、販売戦略を練り上げ、別の作戦も立てていた。その作戦とは、『東亜日報』、『朝鮮日報』、『京城日報』などに広告を出し、また主要新聞にクイズを出題することで注目を惹きつけたことである。『京城日報』を例にとると、こうである。クイズを出題し、「大懸賞」という表題を掲げ、当選者には豪華な懸賞を用意することで、人々の歓心を買おうとしていた。その問題の解答とは、ただ葉書に「レート」と書かせ、郵便ポストに投函させるだけの単純かつ簡単なもので (第10図)、第一等当選者には「新型腕時計」、あるいは「銘仙座布団」、「ボストンバッグ」などが贈られ、三等でも 100,000 名に「レート粉白粉」が当たることになっていた (『京城日報』、昭和 11 年 10 月 23 日)。クイズ自体は日本の各新聞社にも送られていたので、その応募者は日本各地に散らばっていたが、一等賞の獲得者には姓名から判断して朝鮮半島出身者が 30 名弱ほど含まれていた (『京城日報』、昭和 12 年 3 月 31 日)。全体の比率を考えて

た。興味深いのは、そのなかに「レートの輝き」という題目の映画が上映されていたことである（『京城日報』、昭和11年9月22日）。この上映には京城日報社が後援者になり、その屋上が会場として提供されていた。入場料は無料であったというから、多くの観客があったに違いない。レートの宣伝工作は巧妙であった。

このような化粧品ブランドのありかたを考えると、東京への留学生だけが近代に目覚めたわけではないことが理解できたと思う。これに加えて、すでに取り上げたレートの絵葉書を重ね合わせ、京城一の繁華街、南大門に聳えるレートの高塔の果たした意義を考えてみると、その存在感の重みは測り知れないものがあってよい。西欧的身体観、とりわけ白肌を具現化するのに貢献したレートは、この建築物の存在によっていっそう一般市民に強い印象を植え付けたことであろう。それだから、留学生が東京市内の街並みを見て感じた時のように、レートの高塔を見上げた時、庶民の眼にも文明に輝く憧れの対象として映り、そこが東京と同じく、先進性を確認させる場になっていたと考えても不思議ではない。

3 ハリウッド映画がやってきた

1) 研究史への断章

日本統治期に朝鮮には日本の映画が持ち込まれていたし、朝鮮で制作された映画もあって、大衆娯楽の一環として映画は市民生活に溶け込んでいた。この時期の映画に関する研究には蓄積がある。李英一・佐藤（1990）の著作はすでに古典になっているし、最近でも多くの著作に接することができる。例えば、下川正晴には、埋もれて忘れかけていたフィルムを発掘し、その意義を評価した業績がある。下川の『日本統治下の朝鮮シネマ群像』（2019年、弦書房）は、戦前期に朝鮮で制作され、京城の明治座で公開された『授業料』に光を当てた作品であって、授業料が払えない貧しい朝鮮人小学生が厳しい現実のなかを生き抜いていく姿を描き出している（下川2019）。この『授業料』の特徴は朝鮮語のセリフを多用しつつ、日本語の字幕も用意され、日・朝の両者に向けてマーケットを広げるという戦術が成功しているこ

とだが、それ以上に評価される点は、児童のいたいけな心情を読んだ作品として感動を呼んだことにある。そのほかにも、下川は近年の韓国映画の解説を試みていて（下川2020）、戦前の映画として『望楼の決死隊』、『半島の春』、『家なき天使』などの作品を取り上げ、日本統治期の映画界の状況を読者に伝えている。

韓国で出版され、日本語に翻訳された図書も少なくない。近年に限っても、「アリラン」の分析を手がけ、朝鮮映画史を展望し、かつ撮影の舞台裏にまで光を当てた研究がある（安鐘和〈長沢訳〉2013）。映画『春香伝』に見るオリエンタリズム、あるいは政治的メッセージを読み解いた研究もある（梁仁實2022）。これに、鄭琮樺（2017）、あるいは、崔吉城（2018）を加えてよい。鄭と同じように崔も映画の画像を多用して読者の理解を深め、絵葉書や写真なども題材にしつつ、戦前の朝鮮社会の世相が読み解けるように工夫している。

これら研究の共通点を挙げれば、韓国映画の意義を論じるにあたって、日本を参照枠組として考えていることに特色があった。しかし、この章で議論しようとする課題は、これらの先行研究から離れ、ハリウッドを中心としたアメリカ映画に焦点を当てることを目標に置いている。戦前にも、日本と同じく、朝鮮でも洋画は大都市を中心に上映され、銀幕に投影された世界に憧れを持つ人びとを生み出してきた。もっとも、その一方で西欧文化との軋轢、あるいは近代文明自体に戸惑いを隠せない人たちを生み出してきたことも確かである。議論の初めに、面白い挿絵があるので紹介してみよう。『京城日報』（昭和15年8月11日）には、京城宝塚劇場での封切映画、『おしゃれ地獄』の宣伝広告が掲載されていて、その文面には、当時の京城風俗を揶揄した内容とも受け取れる内容が書かれている。皮肉が込められた、その文章を読んでみよう（第12図）。

若しも京城で両班の御令嬢がホットドックを頬ばり乍ら本町通りを歩いたり近代青年がカウボーイ姿で鐘路辺りをのし歩いたとしたらどんな事になるでせう？／此れは併も華の巴里の真中に飛び出した素晴らしい珍談奇談で



第 12 図 「おしゃれ地獄」と題した新聞挿絵
 出典：『京城日報』、昭和 15 年 8 月 11 日。

す。／ユーモアと風刺の溢れる近代画！

この文面からは、華やかなパリと比べてダサイ京城、この対比が暗黙裡に語られていると解釈できそうである。高貴な生れの令嬢がホットドッグを街中で歩きながら食べる姿は、パリではモダンガールと映るが、京城では礼儀知らずと罵られてしまう、という意味なのであろう。映画題目が語るには、花の都パリでのおしゃれは、京城では地獄だ、と言うことになる。あるいは、それだけ京城は野暮ということになろうか。

とはいっても、朝鮮には昭和期に洋風化の波が伝わっていたし、なによりして洋画鑑賞が流行し始めていた。以下は、その洋画をめぐる議論である。

2) 京城の映画事情

一般的に言われていることだが、日本統治期、とりわけ 1930 年代の京城は、日本人と朝鮮人との間で都市空間が二分され、民族ごとに区分された生活圏を形成していた。主に朝鮮人が居住する北村、対して日本人が生活拠点を置いていた南村との二分である。この領域区分は映画の興行にも影響していて、毎日のように新聞に掲載されている「演劇・映画欄」にも差異を生み出していた。「東亜日報」ではハングル表記を主とし、北村の映画館のみを紹介し、一方、『京城日報』は日本語による南村の映画館の紹介に終始する。この差異は民族の分布状況にみごとに対応している。昭和 11 年の段階で、それぞれの勢力関係は次のよ

うに整理される。なお、龍山市には京龍館があって、これは日本人を対象としていた。

北村：主に朝鮮人を観客の対象——朝鮮劇場、団成社、優美館。

南村：主に日本人を観客の対象——大正館、朝日座、喜楽館、中央館、浪花館、東亜倶楽部。

このうち、北村の団成社と優美館は、朝鮮映画とともに洋画も扱う映画館であり、『ポンペイの最後』などの娯楽作品が鑑賞できたが、一方の南村では洋画は上映されていなかった。朝鮮人の多く居住する北村の特徴とは、アメリカ・ハリウッド映画が楽しめることにあった。ところが、昭和 11 (1936) 年 10 月に南村に「明治座」が新築落成を迎えたことで、京城の映画館事情は変わり始める。明治座は明治町（現・中区明洞）にあり、「新鮮と近代感の粹」をモットーにしている、近代的な建築様式を誇り、しかも収容能力も 2000 人と大規模な映画館として建設された（『京城日報』、昭和 11 年 10 月 7 日）。この明治座の特徴は洋画を中心に、邦画を加え、時には朝鮮映画を抱き合わせで上映することにあった。その営業戦術からは幅広い層の入場者を確保する意図が見え隠れする。しかし、この映画館の特徴はそれだけではなかった。明治座について、すでに梁仁實の研究があるので（梁仁實 2022: 173-185）、それを参考にして考えてみよう。この建物の内部には他に見られない特徴があった。そこには、食堂、喫茶店、売店も営業していて、まるで「デパート風の雰囲気」が漂い、多くの「京城人を吸収せずにおこな」かったからである。映画の批評子は、こうも言っている（無署名 a: 1939: 127）。

広い階上の廻廊を相場師然とした男が芸者連に取巻かれて昂然と歩いてあたり、半島の女学生が彼女のリーベらしいのと休憩のひとときをソファで囁き交はしてあたりする風景に接し得るのもなのである。

この引用文からは、まるでカフェを兼ね備えた雰囲気映画館を思わせる。まるで、先の「おしゃれ地獄」を思わせる風情であるが、時代の先端



一部広告省略



第 13 図 「明治座新築落成」を告げる新聞記事

出典：『京城日報』、昭和 11 年 10 月 7 日。

をいく、いわば人々の社交の場であったとも言えそうである。「明治座はカフェや売り場、そして食堂までそろい、スペクタクルを楽しめる映画館まで一つの空間に配置された、明治町の縮図ともいえるテーマパークのようなものだった」(梁仁實 2022: 174)。この小型「テーマパーク」の存在こそが京城の街の外観を変えていったようだ。さまざまな層からの集客を集めることで人々の往来の機会を増やすことになった結果、「京城の南村と北村のエスニックな境界はあいまいなものになり、朝鮮人も明治座で朝鮮映画や洋画を楽しむようになった」し、「明治座のこうした広報戦略は朝鮮人の観客にも大いに歓迎され、観客の六割が

朝鮮人になる日もしばしばあった」(梁仁實 2022: 174-175、179)。こうして、それまでの地域的な分離が解体し始め、異種混濁した空間に変容されていく傾向さえ生まれてきた。明治座は京城の映画興行界の中心にまで成長していき、多くの朝鮮人の観客を集め、それによって常に朝鮮で一番の興行成績にまで達したのである(時実 1943: 51)。

ただし、明治座は映画だけの上映館ではなかった。ベルリンの喜劇楽団、ワイントラウブが来日した時、この明治座でも公演していて、テンポの速いジャズの演奏は反響を呼んだ(『京城日報』、昭和 12 年 3 月 11 日)。映画上映で面白い話は、

シェイクスピアの名作、『ロミオとジュリエット』が上映されていたことである。この映画は1936年にニューヨークのブロードウェイで封切られ、1937年4月には満洲ハルビンでも上映されていた(山路2022b: 70-72)。それが、2か月半後の7

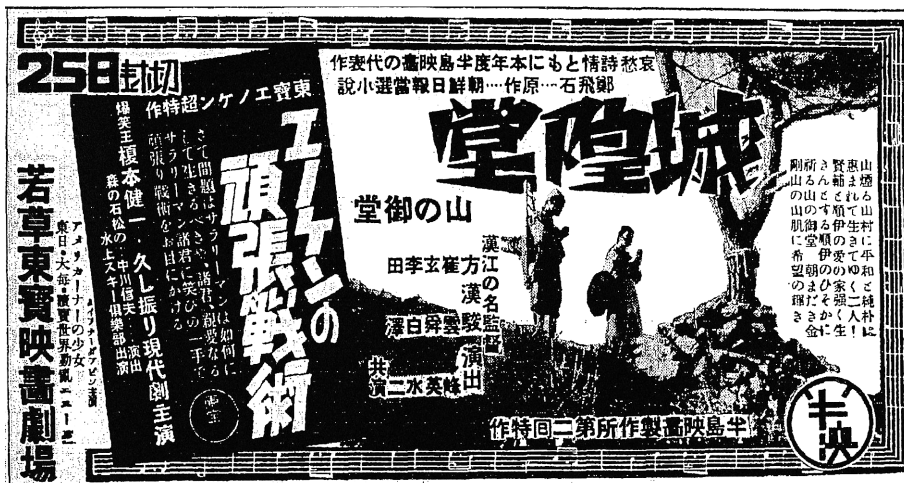
月には京城の明治座に姿を現わしていた(『京城日報』、昭和12年7月15日)。名作は、時を隔てず、場所も超えて駆け廻り、各地で人気を集めていたことになる。

この昭和12年は京城の映画界では別の話題が人目をさらっていた。若草映画劇場(若劇)の開館である。冷房設備を完備し、「娯楽の殿堂」、「東京、大阪と同時に封切する「若劇」と高らかに宣伝を行い、洋画に人々を惹きつけていった。『宮本武蔵』などの邦画も上映するが、なんといってもゲーリー・クーパー主演の『真珠の首飾り』(『京城日報』、昭和11年11月10日)、ジャン・ギャバン主演『我らの仲間』(昭和12年6月15日)、エロール・フリッ『進め竜騎兵』(昭和12年5月26日)などの大物スターを動員しての娯楽作品が目につく。そして朝鮮映画では、金剛山麓で純朴に生きていく姿を描いた『城隍堂』(『京城日報』、昭和14年9月25日)も銀幕を飾っていた(第15図)。昭和10年頃の京城には映画を通して欧米の文化が浸透してきたのである。

一方、明治座では、どのような映画が上映されていたのであろうか。初日のこけら落としでは、松竹キネマ系統の『踊る明治』と、『男性対女性』(主演: 田中絹代)の二本立てであった。いずれも邦画であったが、その後、明治座は邦画と洋画との組み合わせで営業を続けていく。ただし、それだけで話は終わらない。第2表に見るように



第14図 明治座映画広告『ロミオとジュリエット』
出典: 『京城日報』、昭和12年7月15日。



第15図 朝鮮映画『城隍堂』の映画広告
出典: 『京城日報』、昭和14年9月25日。

『旅路』と題した朝鮮映画も上映されていた。朝鮮人俳優は朝鮮語で語り、画面には日本語の翻訳が添えられていた。映画の内容は決してよい出来栄ではないと批判されたが、俳優人の熱演は評価されていた（『京城日報』、昭和12年5月2日）。日本人が多く住む地区での朝鮮映画ならばこそ、考えてみれば、この明治座の存在意義は高かったと言える。

あらためて明治座の大きな特徴を指摘すれば、アメリカ映画、とりわけハリウッド映画を取り入れていたことにあった。『小都会の女』は、人気スター、ロバート・テイラー主演である（第2表参照）。ほかにも多くの名作が上演されていて、『巨星ジグフェルド』はアカデミー賞受賞作品である（『京城日報』、昭和12年3月28日）。青

少年に馴染みやすい映画として、ロシアのコザック兵を題材に、文豪ゴーゴリーの作品を映画化した『隊長プーリバ』も鑑賞できた。ハリウッドの「西部劇」も堪能できた。昭和15年8月には、ジョン・フォード監督、ジョン・ウエイン主演の『駅馬車』が上映されている。アメリカ・アリゾナの平原を舞台にした西部劇で、著名な監督、ジョン・フォード、そして大スターのジョン・ウエインが主役として出演している。おそらくはこのハリウッド映画は日本語の字幕が使用されたと思われるが、日本語が分からない人たちにとっても、ジョン・ウエインの登場なら、娯楽作品として十分に楽しめたはずである。

京城の昭和10年代には多くの映画館が林立していた。数量的には断然、邦画が優っていたのだ

第2表 明治座の上映プログラム（昭和12年前半期）

	洋画	邦画
1月10日	小都会の女	青春満願飾
1月17日	—————	丸鬚混戦記、弥之助行状記、富士に立つ退屈男
1月24日	巨星ジグフェルド（前編）☆	女のいのち
1月31日	巨星ジグフェルド（後編）☆	花嫁かるた
2月7日	隊長プーリバ	花籠の歌
2月14日	踊る海賊	秋の怨
2月21日	夜の空を行く	二代目弥次喜多
2月28日	地獄への挑戦	長者息子 激愛無敵艦隊
3月7日	桑（サンフランシスコ）港	人妻椿前・後編大会
3月14日	桑（サンフランシスコ）港	荒城の月
3月21日	—————	女ひとり 春の女性
3月28日	禁男の家	情炎娘ごころ、その夜の秘密
4月4日	極楽双児合戦	大坂夏の陣
4月11日	—————	新道（前・後編）
4月18日	潜水艦 SOS	あばれもの
4月25日	旅路（朝鮮語、日本語字幕）★	桃子の貞操
5月2日	ターザンの逆襲	出船の歌
5月9日	ターザンの逆襲	母の夢
5月16日	嵐の翼	朱と緑（前・後編）
5月23日	愛怨二重奏	女のまこと、此の親に罪ありや
5月30日	帝国海軍の精観	女医絹代先生、腕白時代
6月6日	楽聖ベートーヴェン、結婚劇場	—————
6月13日	—————	旅の陽炎、奥様に知らすべからず
6月20日	目撃者	恋人の日課
6月27日	結婚クーデター	幸福の素顔

注) この表の日付はすべて日曜日である。

番組の合間に「毎日ニュース」「京日世界ニュース」、あるいは「朝日世界ニュースが上映されている。

注) 新聞では映画館ごとに記載され、洋画・邦画の区別はなされていない。

—————は記載がないこと表す。

注) ☆=「巨星ジグフェルド」はアカデミー賞受賞作品（『京城日報』、昭和12年3月28日）。

注) ★=「旅路」は朝鮮映画。朝鮮人俳優の会話は朝鮮語、字幕は日本語使用。

出典：『京城日報』（それぞれの日付による）



第 16 図 ハリウッド映画、『馬車』の広告
出典：『京城日報』、昭和 15 年 8 月 22 日。

が、北村で営業をしていた団成社は依然として洋画を得意にしていたし、昭和 11 年になると新たに若月映画劇場が誕生した。この映画館も邦画と洋画の組み合わせで存在感を示していて、アメリカ映画は衰えることはなく、人気を保ってきた。しかしながら、日中戦争の泥沼化とともに消費生活は押さえこまれ、奢侈品の製造・販売の禁止令が施行された昭和 15 年以後、映画界は厳しい冬の時代を迎えることになる。この事態は日本も満洲も台湾も同じであった。洋画の輸入は制限されたため、経営者は在庫品だけで活動せざる事態に追い込まれていった。とはいえ、一時期だったにしても、洋画の花が咲いていた時期があったのは、確かであった。

4 伝統との葛藤

西欧、とりわけアメリカの消費文明の浸透について今までに論じてきた。この近代的産業の興隆は各方面でさまざまな影響を及ぼしてきたが、初期の段階では伝統との葛藤を生み出した。表現を変えれば伝統として定着していた儒教的精神と矛盾をきたしながら、西欧的世界が浸透していった時代であった。ここで視点を変えて、伝統的な女



第 17 図 絵葉書「下流韓人の母子」
儒教では養育は母の務めとされ、かつ男子尊重の観念が強かった。この女性が乳房を露出しているのは、男児養育の義務を果たしているとアピールするためであった。

性の身体表象を考えてみよう。

第 17 図は、乳房を露わにして子供を背負う女性が写されている絵葉書である。儒教の教義に従えば、古くから女の仕事は育児とされ、とくに男児の養育は重要視され、乳飲み子に対する授乳は母親としての責務とされてきた。天下にその行為を示すことは、儒教の精神に基づいた誇り高い行為とされていたのである。この絵葉書は、男子の養育に専念していることを衆知に告げる象徴的意味を持っていたことになる。ところが近代に至ると、儒教的教義に逆行する行為が頻発してくる。伝統と近代との軋轢がはっきりと出てくる別の場面を考えてみたい。身体に関わる問題のなかでも髪型は興味ある話題を提供してくれる。そこで、簡単に触れておく。『東亜日報』に掲載された「断髮娘」と題した語りは、新しい風俗として登場した「新女性」についての話題を提供してくれる（『東亜日報』、1922 年 6 月 22 日、6 月 24 日）。その記事とは、女学生の姜香蘭が髪を切り、男の服を着るに及んだ少女の伝記で、儒教的な社会秩序に批判的で、女の地位向上を目指す少女としての姜香蘭の高い志が語られている。しかし、その



第18図 カフェのマッチ箱デザイン

京城のカフェに流通していたマッチ箱のデザイン。モダンガールのデザインはおそらく日本で制作されたものであろう。デザイナーも日本人だと思われる。

希望が受け入れられずに苦悩し、ついには社会の無常を呪い自殺まで試みたのだが失敗し、その教訓から男に頼って同情を求めることは間違っていると自覚するに至る。そこで、男と平等に生きようと決意し、髪を切り男の服を着ることを決意した。断髪することで自己の主張を表現したが、社会の風当たりは強く、退学処分を受けてしまうという話である。この語りからすれば、この少女は、旧制度の束縛から自由になりたいと願う大正期に現れた「新女性」のはしりということになる。

これが昭和期になると「新女性」はモダンガールとして装いを新たにして登場してくる。それが顕著に見られたのが、カフェの女給であった（第18図）。『京城のモダンガール』を執筆した徐智瑛によれば、カフェとは「ジャズと西洋のダンス、西欧趣向の記号に満ちた、モダニティが具現化される日常の場であった」（徐智瑛〈姜信子・高橋梓訳〉2016: 177）。この徐智瑛の著書で興味深い論点に妓生の女給化を指摘した個所がある。「ジャズ妓生」、あるいは「モダン妓生」とでも言うべき妓生の変貌ぶりである。1930年代には、伝統的な歌舞の職芸を専門にしていた妓生が、近代的な趣向を披歴し始めたと指摘していることは意義深い。この時代の京城ではジャズが巷で流行し、妓生もまた人々の趣向に沿うように自分たちを変化させていったというのが、徐の認識である（徐智瑛〈姜信子・高橋訳〉2016: 170-171）。

李端求の論文からも、花柳界や料理屋でジャズが流行していたという証言は伝わってくる。「ジャズの気分は紅灯緑酒の香り高さ花柳界まで流れ出し、料理屋で客が注文する歌の三分の二はジャズ気分を高める流行歌だ」と李は言っている（李端求 1929: 35）。この時期、カフェの女給には女優からの転身組が相当数、見ることができ、流行とでもいうべき現象が起きていた（李端求 1932: 34）。そのカフェで働く女給は、世間的には性的放縦さが取り沙汰され、批判の対象となることがしばしばあったが、西欧的装いをした外見とともに、社交術にたけた存在として浮上してきた新たな文化の担い手でもあった。女給とは、いわば「近代体験の行為者」であった（徐智瑛〈姜信子・高橋訳〉2016: 185）。

5 カフェとダンス

大阪を発祥地とするカフェ「美人座」が京城に開店したのは昭和6（1931）年のことであった。美人座は東京へ進出した後、各地に支店をつくり、この年には京城にまで展開していた。1930年代初期頃の京城には、夜の繁華街をネオンで照らす多くのカフェが軒を連ね、ジャズの音とともに、嬌声に満ちた叫び声が周囲にまで響くような光景が広がっていた。一口にカフェといっても、その外観も室内装飾も多様であった。第19図のサロン・アリランに見るような落ち着いた雰囲気

(部 外)



(城京)

南山荘サロン・アリラン

(部 内)



第19図 京城の代表的カフェの一つ、サロン・アリランの景観

出典：無署名 c 1932；挿絵写真。

のカフェもあったし、エロを強調するカフェも存在していた。それほどに、カフェには多種多様な人間模様が繰り広げられていたのである。

この新しい都市文化の登場をメディアは見逃すはずはなく、なかでも『京城日報』はその状況に敏感になり、その生態を興味本位に記事として書きたてていく傾向さえ見られた。当時の風俗の生き証人と心得たのであろうか、この新聞は頻繁に特集を組み、多彩な分野に及ぶ連載記事で紙面を飾っていた。内容的にはゴシップ記事の域を出ることはなく、次々と紙面を賑せた記事は現代の大衆週刊誌にみるような世俗的読物であった。雨後の筍のように出現したカフェの主役は女給であり、女性の社会進出として注目され始めたことを意味しているが、その一方で非道徳的な面が強調され、公安当局の監視の眼が向けられたことも事実であった。しかしながら、妓生に代表される伝統的な慣習の殻を突き破って、あるいは昔ながら

集募給女顔似

江 静 田 岡 帝 子 高 津 松 中 竹 代 中 田 夏 川

縮切後五日間以内に京
城日報紙上に當選者寫
眞掲載す

縮切 昭和六年六月十
五日
宛名 京城本町二ノ五
サロン・アルプス

一 賞賞一枚送附
二年齢以上七歳以下
一、脚穿靴は一切返
戻せず

者 選 者
谷 垣 崇 彦 山 田 謙 夫
山 田 謙 夫 寺 田 謙 夫
山 田 謙 夫 寺 田 謙 夫
山 田 謙 夫 寺 田 謙 夫

五目丁二町本府城京

スプルア・ンロサ

番四二一局本話電

第20図 カフェの女給募集の新聞広告
「似顔女給募集」と題して、「サロン・アルプス」では新聞広告を出していた。
出典：『京城日報』、昭和6年5月19日。

の儒教秩序の制約からの解放を求めて、新たな人々の日常生活が作り出されようとしていたことは確かであった。

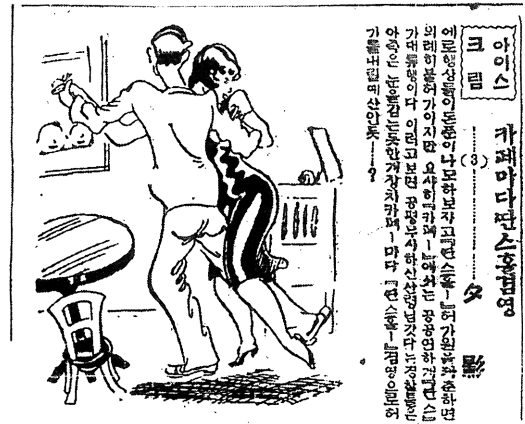
この機運に乗じて、カフェの経営者側は夜の社交界を活気づけるために巧みな仕掛けを編み出していく努力を惜しまなかった。とりわけ女給の確保は直接的に営業成績に関わることなので、経営者はその採用にあたって新しい企画を試み、意表を突くような戦術を取ることもあった。例えば、京城の繁華街、本町通り（現・忠武路）に位置する「サロン・アルプス」の巧妙な企画はみごとであった。このカフェが昭和5年に開店した際、女給採用にあたって仕組んだ巧妙な作戦を考えてみよう。その作戦とは、採用に当たって新聞広告を利用し、当時の日本でもっとも有名な女優にそっくりな美人を女給として求めようとした企画である。有名美人とは、日活、松竹、帝キネ、東亜という映画会社に属していた女優、例えば松竹の田中絹代らの顔写真を新聞紙上に掲載し、その女優と似た顔が採用条件だとしたうえで、応募者には自己の写真の提供を求めていた（『京城日報』、昭和6年5月19日）。有名女優と顔が似ていることが女給の採用条件とは、よく考えたものである。

このサロン・アルプスは何かと大衆受けを狙っての企画を繰り返していたことでも知られていた。その年の4月には「アルプス・オン・パレード」と称し、特別な料理を提供するとの触れ込みで「大観桜会」を開催していた（『京城日報』、昭和6年4月21日）。しかも、この行事は毎年繰り返されていたようだ。当時のカフェのなかには「観桜会」と称し、店内に桜の造花を飾り、祝賀気運を盛り上げることが広く行われていたが、サロン・アルプスも同じ企画を実行していたのである。この時には大阪・美人座の女給も招待したというから、相当なまでの入れ込み方が伝わってくる（『京城日報』、昭和6年4月23日）。

この派手な演出に代表されるように、カフェの賑わいは大衆を魅了していた。この世相に敏感に反応し、その裏舞台を覗くのもまたメディアの仕事であった。このあたりの事情を取り上げてみよう。『京城日報』は三回にわたって「カフェ十字街」と題した、いくらか辛口の記事を載せている。

- 1、「このまゝでは納まらね江：こはい本町署を相手に／カフェ側尻をまくる」（昭和6年6月23日）。
- 2、「巨鯨のやうに客を吸ふ一流所／ボロイ商売には違ひないが／群小の大部分は火の車」（昭和6年6月24日）。
- 3、「女給生活の内幕／華やかな灯の蔭に／紅涙を絞る彼女等」（昭和6年6月25日）。

これらの記事の題目から分かるように、カフェの華やかさとともに、その裏面で四苦八苦する弱小カフェの現実を照らし出すことに記事の目的があった。大規模経営のカフェの裏で、経営の苦しさを嘆く群小のカフェは淘汰されていくのではないかという危惧感がその文面には滲み出ている。この二極分化していくなかで、繁栄していくのは設備投資が充分な大規模なカフェであって、それらカフェは戦術としてエロ情緒を打ち出していると記事は着目している。大規模カフェでは内部にステージを設置し、舞踊団も招致しようとする動きが出てきたとも記事は報じていて、過熱ぶりが伝わってくる（『京城日報』、昭和6年8月13



第21図 新聞漫画：「カフェごとにもダンスホールを兼営」

新聞には、時局を表現する漫画が描かれている。「この頃カフェでは堂々とダンスが大流行だ」と、この漫画は世相を斬っている。

出典：『朝鮮日報』、昭和6年6月26日。

日）。ジャズのレコードをかけながら、カフェ内で女給相手にダンスに興じることが流行し始めた、と書き立てたのである。ダンスを踊る場所と言えばダンスホールであるが、そのダンスホールの営業は許可されていない現実が京城にはあった。そこで、ホールの代りにカフェで踊る、というわけである。申明直の著書、『幻想と絶望』は、『朝鮮日報』などに描かれた漫画を題材にしてモダンガールなど、社会を賑した当時の流行現象を記述した内容であって、多彩な方面の社会現象が俎上に載せられていることに興味がそそられる。そこでは、『朝鮮日報』に掲載された漫画を収録し、カフェでのダンスの流行が詳細に論述されている（申明直〈岸井・吉田訳〉2005: 138-143）。ここでも、興味をひく記事の漫画を例示してみよう（第21図）。その記事は、「カフェごとにもダンスホールを兼営」と題する風刺漫画である（『朝鮮日報』、昭和8年2月18日）。警察を尻目に、カフェでは堂々とダンスが行われているとの指摘はいささか誇張しているようにも思えるが、警察の監視の眼が光っているということは、それだけダンス熱が広がっていたとも解釈できる。

申明直は、さらに京城という都市空間の特異性を議論している。すでに触れておいたように、京城という都市は空間的には二分割でき、南地域（南村）は日本人商店街が集中する一帯で、百貨

店やカフェが軒を連ねる消費都市である。そこは近代的な様相を帯びた地域であって、モダンガールやモダンボーイが闊歩していた地域である。他方、それとは対照的に日本統治が開始される以前から朝鮮人が居住していた、北の地区（北村）があった。この両者間には顕著な差異があって、そこに申明直が見出した現実、近代的な日本人居住区と貧困な朝鮮人居住区とのはっきりした落差であった。幻想的なほどに憧れに満ちた近代的な都市生活、他方で対照的な旧態のままの都市生活、このように二種に分離された京城の姿、この「二重イメージ」を説くことが著者の目的であった。けれども、申明直に従えば、近代的な世界といえども、それは幻想にすぎず、この落差を申明直は「幻想と絶望」という言葉で表現した（申明直〈岸井・吉田訳〉2005: 43）。しかし、京城が日本人と朝鮮人との空間的分離があったにしても、どういう意味で近代そのものが「幻想」であったのか、申明直の説明は明瞭ではない。

ここで明確にしておくべき事柄は、近代が植え付けた世界を「幻想」として理解しようとも、紛れもなくそこには生活世界があり、その「現実」がどのように表現されていたのか、その実態を見ておくことが重要であって、法と現実が衝突する場面での日常世界が記述されるべきであろう。その日常世界は複雑である。さしあたっては、昭和初期に世間を席捲し、生活の一部にさえなっていたエロ、グロの世界を取り上げてみたい思いに駆られる。それはカフェやダンスホールの世界であり、また女給が働く世界である。とりわけ西洋起源の社交ダンスは、当時のメディアが大々的に報じるほどに社会的関心が高かったし、高ければ高いほど倫理的評価をめぐって激しい論争が巻き起ってもいた。その倫理的側面とは、社会の公衆道徳と関連しているだけに、問題の根は深く、公権力の規制が強く働く磁場になっていた。満洲では、社交ダンスは卑猥な行為とみなされて取締対象になり、規制を求める運動が起ったことについては、すでに論じておいた（山路 2022b）。それならば、朝鮮半島ではどうであろうか。

社交ダンスを風紀を乱す行為と考え、反発を強める朝鮮の公安当局の態度は満洲と類似している。社交ダンスの取締りはすでに早い時期から

「風紀廓清」（『京城日報』、昭和2年5月31日）という名目で行われ、カフェ内での社交ダンスは警察の取締りの対象であり、女給との社交ダンスが発覚したなら即時改善という厳しい通達が京城でも出されていた（『京城日報』、昭和2年6月15日）。だからといって、社交ダンスが住民の生活から消滅したわけではない。むしろ警察との間で暗黙の格闘が生じていて、「禁断のダンス」は密かに行われていた。メディアの伝える情報を取り上げてみよう。時は昭和8（1933）年のこと、警察は聴き込み情報を得て内偵を進めていたところ、ダンスの講習会に名をかりた市内の練習所「京城舞踊研究所」の存在を知ることになる（『京城日報』、昭和8年1月21日）。そこで経営者を召喚し取調をしたところ、会員名簿という戦利品も入手できた（『京城日報』、昭和8年1月22日）。この捜査によって社交ダンスは想定以上に拡がりを見せていたことが判明し、根の深さを警察は認識するに至る。危機感を抱いた警察はさらに情報を得て監視の眼を広げると、花街を含め、広範囲にわたっていることが判明した。こうして、カフェに対しても「風紀取締」の掛け声が叫ばれ、風俗紊乱を糺す観点から警察の監視の眼が厳しく向けられていく。この一連の警察の動向から分かるように、時代の根本的思想を表現する言葉は社会の「廓清」という概念であった。それはこの時代を理解するうえで必須の言葉であった。

広く浸透していくダンスの流行、その摘発、こうした一連の出来事が報道されるたびごとに世間は衝撃を受け、社会問題視していく。この状況をメディアは見逃さなかった。『京城日報』は「禁断のダンス」という見出しを付け、三回にわたり、各界の識者の意見を集約した連載記事に取り組む。それほどまでに、メディアの熱の入れようは尋常ではなかった。この連載記事では、社交ダンスは許可できないと言い放つ警察幹部の発言を紹介しながらも、他方では「時代の要求」を再検討せよ」といくらか同情した論調も紹介されていた（『京城日報』、昭和8年1月24、25、26日）。にもかかわらず、公安当局は風紀の取締りを緩めず、ダンスの秘密同好会の動きを内偵し続ける。その結果、有閑マダム、学生、妓生などで組織されていた舞踏会の存在をまたも見つけ出す

のに成功する。その時の様子を伝える新聞の見出しは派手であった。「秘密ダンスを包む／桃色の醜状発かる」と報じた後、副題には「料理と夢を贈り交はす会員四十余名／料亭でダンスの妓生は許可取消」と続けていて、「桃色の享楽」の世界をあぶり出したと成果を誇っていた（『京城日報』、昭和11年2月20日）。

ダンス愛好家は、それでもひるむことはなく、ダンスホールの設立をめぐる動きを活発化させ、公然とダンスホールの設立公認を求めて運動を起こしていく。雑誌、『三千里』（1937年1月号）には、レコード会社芸芸部長、妓生、女給、映画女優などが発起人になり、総督府の三橋警務局長あてに提出された、ダンス許可を求める嘆願書が紹介されている。それを読むと、社交ダンスに対する愛着の強さが伝わってくる。金振松（2005）の著作、『ソウルにダンスホールを』では、その嘆願書にはダンスをめぐる人々の感情が紹介されていて、その運動がめざす方向性がよく分かる。発起人たちの思いがそのまま込められた「警務局長に送る我らの書」と題した嘆願書は、社交ダンスは近代的な娯楽だと訴える内容であって、ダンス愛好家たちの熱意が伝わってくる。それは、東京でのダンス界の動向に触れ、ダンスの美点を列挙し、ダンスにまつわる不祥事の報道によって印象が悪い現実があるものの、本来的には明朗で、かつ行儀のよいものであって、それゆえ朝鮮で許可されないのは合点がいかない、と冷静に訴えかける内容の訴状であった。しかしながら、警務局長の態度ははっきりしていた。きっぱりと、「ダンスホールは絶対に罷りならぬ」と一貫した態度で応じていた（『京城日報』、昭和12年5月16日）。

警務局長が厳しい姿勢を示したのは、当時の日本での状況を認識し、その方針に準じたからであろう。昭和初期の東京の警視庁総監として名を馳せた丸山鶴吉は、風俗営業に厳しい態度を取り、カフェでの猥褻な行為は断じて許さないとの方針を取り、著名な作家、サトウハチローと激しい論争をした人物としても有名であった（山路2021a: 31）。当時の趨勢は、規制強化をもくろむ警視庁の方針に沿って、地方の警察も対策を講じる方向に進んでいったので、朝鮮での対応は予想される

ことであった。その対象はカフェのみならず、ダンスホールも視野に置いて、風俗営業という観点から厳しい視線を投げかけていた。例えば京都府では昭和8年に「府令34号」にて「ダンス取締規則」が公布されている（伊藤1933: 15）。大阪府では昭和になってすぐユニオン、パウリスタなどのダンスホールが標的にされ、昭和2年10月に大阪のダンスホールは全部廃棄されたし、昭和8年に、「府令第6号」として「舞踏教授所及舞踏教師取締規則」が公布されている。京城での対策は、こうした一連の大都市でのダンスホールの禁令を準用したもので、以後、取締り体制は整備されていく。日本内地でも植民地でも、同じ発想に基づいて取締りが法的に整備されたのだが、その趣旨はいずれも風俗営業を社会秩序の壊乱原因であるとして、糺すことにあった。

6 エロスと法秩序

朝鮮総督府が各種の料理店や芸妓置屋を含め、芸妓、娼妓などの接客業について取り締まりの法令、すなわち「料理屋飲食店営業取締規則」、「芸妓酌婦芸妓置屋業取締規則及貸座敷娼妓取締規則」を發布したのは大正5（1916）年であった（朝鮮総督府警務局編1936: 104）。それから10数年も経過し、社会状況は大いに変化し、とりわけ昭和時代になってカフェ、バーなどの遊興施設が増加してくると、風俗取締りのうえて新たな法令の整備が求められていく必要に迫られた。カフェ、ダンスホールなどの登場は様々な社会問題を生み出し、その生態は新聞で日夜の如く報道されるに及んで、公安当局は風俗営業の観点から取締りの強化に努める時代に突入していく。「エロ」という言葉が頻繁に口から発せられ、随所で「歓楽の灯」を目の当たりにするようになったし、夜の街で遊興に溺れる学生の存在も問題になった。高価の衣装をまとう女給においては「衣装地獄」という言葉がささやかれ、話題にもなった。スペシャルルームと称して暗いボックスを設けるカフェも現れたし、なによりも女給のエロサービスが派手になっていく傾向さえ生まれ出した。こうした状況は新聞紙上では毎日のように繰り返して報道され続けていた。『京城日報』は昭和6年暮れ、



第 22 図 新聞漫画：「芸者から女給へ」

これは台湾での新聞漫画である。この一口漫画には、「歌は暮れ行く、芸は身を助けず、アア時節だナー、芸さえなけりゃ女給になるものを」という皮肉が込められた但書が添えられている。芸者が没落して女給に人気が集まっていく台湾の世相を皮肉ったものだが、朝鮮でも同じであったと考えてよい。

出典：『台湾日日新報』、昭和 8 年 11 月 20 日。

「さらば 31 年よ」と題した特集記事を 12 回にわたり連載として組み、その年に話題になったスポーツ界、演芸界、経済界、思想界などの出来事を総括していくなか、その一つとして「カフェー界」もまた取り沙汰している。その記事の見出しは「ガゼン変わったサービスで断然尖端的だネ／モダンな容姿に——歡樂の巷は大異状」と題していた（『京城日報』、昭和 6 年 12 月 11 日）。それは各カフェの女給を紹介した記事であるが、年間の話題として取り上げられるほど、カフェは新しい都会の風俗として脚光を浴びていたのである。妓生など芸の専門家でさえ、元手や技能なしに選べる職場として、女給への転職が相次いだのも一つの傾向であった。『台湾日日新聞』（昭和 8 年 11 月 20 日）に掲載されていた一口漫画（第 22 図）、「芸は身を助けず、アア時節ナー、芸さへなけりゃ女給になるものを」という皮肉に満ちた台詞は台湾での話であるが、朝鮮でも同じであったに違いない。妓生出身の女給が登場したのも、この頃であった。

カフェ業界が派手に世間を賑わしていた反面、

難しい社会問題が発生していたのも当時の世相をよく表している。このような事態に直面して、公安当局は監視の眼を厳しく向けていく。カフェ利用の普及が社会秩序の混乱を生むと恐れたことが、その理由である。風紀問題は治安上からも無視できないと認識した総督府警務局は危機感を募らせ、そこで管轄下の警察署に通達を出す事態にまで至る。例えば、『京城日報』は「エロ制限」と題した記事を発表、警察側の取締の方針を伝えている。公安側の論点を要約してみると、カフェの明朗化、環境の整備と女給の所作に焦点が置かれているのが特徴的である。具体的には、室内の明るさを保ち開放的な空間とすること、女給の採用時には履歴を確認し身許を糺すこと、営業時間は午前一時までを厳守すること、チップ全額は女給の収入とすること、などと厳しくカフェや女給に規制を強いる内容であった（注 2）。なかでも重要な通達事項は、カフェ内で顧客とのダンスの禁止であった。公安当局は社交ダンスこそはエロ行為の温床と見ていたからである。

しかしながら、警察署が発した「通達」は、あくまで「通達」であって、法的強制力はなかった。それにしても、警察が望むような「エロ」行為は減じることはなく、カフェや女給に関して警察首脳を悩ませる問題は後を絶たなかった。カフェが都市民の歡樂に欠かせないという認識は広く共有されていたにしても、「風俗紊乱」という言葉に代表されるように、カフェでのエロ行為を容認すれば、社会秩序そのものを揺るがしかねないという認識自体は、公安当局も持っていた。こうして、今やカフェは大きな社会問題として無視できない存在になり、その在り方をめぐって法整備が必要になっていかざるを得なかった。先にも触れたが、カフェ内で暴力沙汰を起こす「不良学生」の問題、派手で高価な衣装をまとう女給の「衣装地獄」、賭博を開帳する紳士連の存在、そして歡樂の灯が招き寄せるエロ的行為の拡がり、こうした多くの問題が議論の対象に置かれるようになった。「深夜の街に動くもの？ 咄!! 咄!! そこにもこゝにもエロ味百パーセント」（『京城日報』、昭和 5 年 4 月 19 日）と絶叫する新聞記事は珍しいものではなくなってきた。

ところが、カフェ界自体はこうした事態に無関

心を装い、むしろ一層の拍車をかける動きさえ見せてくる。この動向に危機感を感じた公安関係者は対策に乗り出していく。エロサービスの程度を調べるとして、女給の「健康診断」を企てたのはその表れであった。さらに法的整備に向けての準備にも怠らず、享乐的とされたサービスを法律で取締ることを模索していく。かくして、昭和9（1934）年に総督府は「カフェー営業取締内規基準」を制定する。その「内規基準」は日本の警視庁が制定したものの援用であったが、それを定めたことで警察はカフェの取締りに本腰を入れることが可能になった。まずはカフェとは何か、その定義に取り掛かることから始まった。その時の参照枠組みは警視庁の定義を準用することによって、その結果、その第一条でカフェは次のように定義された。すなわち、「本内規ニ於テカフェー営業トハ其ノ名称ノ如何ヲ問ハズ営業所ニ洋風ノ裝飾設備ヲ施シ女給ノ接待ニ依リ飲食物ヲ提供スル営業ヲ謂フ」と（朝鮮警察協会編 1934: 144）。言い換えると、洋風の設備、女給の接待、この二点がカフェの定義の基礎条件とされた。しかし、これは警視庁の下した定義をそのまま踏襲したにすぎない。これに続いてカフェ自体の立地条件、建築物の構造と設備を問題にし、とりわけ客室の形態と照明をこと細かく定めた規則を例示していく。それらの規則も警視庁や他府県の警察署と同じであるし、先に挙げた昭和6年の「通達」と基本は同じである。これで警視庁での取り組みと同様に、朝鮮総督府もまた長年にわたって深く関わってきたカフェとエロティズムの問題に強力な対策を施すことが可能になった。当時、カフェでは女給と顧客がカフェ内のわずかな空間を利用して社交ダンスを演じる光景がしばしば見られたが、その行為の取締りに明確な法的根拠が与えられることになった。「内規基準」の第九條第二項の意図する事柄は明瞭であった。

営業所ニ於テハ舞踏、舞踊、演劇、活動写真、観物、演芸ノ類ヲシ又ハ為サシメザルコト（朝鮮警察協会編 1934: 145）。

カフェ内での「舞踏、舞踊」の禁止、これこそは公安当局がもっとも神経を尖らせてきた問題で

ある。その目的は、言うまでもなく卑猥な行為の取締りであった。「醇風美俗」に違反する行為に対して厳しい監視の眼を向け、「善良な風俗」を守り、それからの逸脱は処罰の対象にすること、こうして公安当局の指針が明示された。繰り返して言えば、その卑猥の行為の代表格は社交ダンスであって、男女二人が身体を密着させ踊ること、それは性的秩序を破壊する行為とみなされたからである。とりわけ、カフェで女給と顧客がジャズの音に合わせて行う社交ダンスは倫理に対する許されざる行為と忌避され、公安当局からすれば「風俗紊乱」と認定され、それゆえ取締りの根幹に据えられることになった。さきの「カフェー営業取締内規基準」の制定目的は、まさにこの点に重点が置かれていた。このように、警視庁の倫理規範は満洲と同じく、そして日本本国とも同じように、この朝鮮にも及んでいくことになった。昭和10年代は、ここ京城でも「浄化」が声高く叫ばれた時代であった。「鐘路方面一帯に亘り／夜の街を浄化：カフェ、バーの整理」（『京城日報』、昭和11年7月8日）、「本町署が乗出した花柳界の浄化」（『京城日報』、昭和11年8月6日）など、この年には「浄化」という言葉が盛んに街の中にこだましていた。この言葉には街を清潔にするという意味もあるが、もっと重要なことはカフェを対象とした取締りを強化していくという公安当局の対策が込められていたことであった。

この時代に重くのしかかった法律は、まだほかにもある。昭和15年7月に至ると、日本各地で実施された「奢侈品等製造販売禁止令」（七・七禁止令）が朝鮮でも実行され、本格的に統制経済の時代に突入していくことになる。その骨子は贅沢品の製造や販売に規制をかける内容であって、腕輪、首飾り、ネクタイピンなどの装飾品、モーニングコートなどの高級衣服はもちろん、多種多様な製品が贅沢品とみなされたし、そうでなくとも節約が求められ、質実剛健の叫び声のもとで多くの産品が製造・販売禁止の対象になっていった。消費生活は制限され、こうして日本は戦時経済に移行していく。貯蓄が奨励されるとともに、享楽面の自粛も求められていく。日本各地はもちろん、朝鮮でも台湾、満洲と同じく自粛の掛け声はこだまっていた。けれども、七・七禁止令の

影響をまともに受けたのは、実は在朝日本人であった。再び第1表を参照してみよう。日本人経営のカフェと女給は昭和15年を境に減少傾向を示している。それに比して、朝鮮人経営のカフェはかえって繁昌していった様子がかがえる。この対照的な傾向を理由づけるのは難しいが、考えられる理由としては、従来の高級遊女であった妓生が没落し、その代替として芸芸が必要ではない、大衆的なカフェに女給として転職していったということであろうか。カフェは衰退の傾向にあったにしても、まともにその影響を受けたのは日本人の側で、朝鮮側には失業した高級遊女の受け皿として用意されていたということであろうか。

それにしても、日本から移植されたカフェは、日本人経営のカフェが衰退するとともに、朝鮮人が主導的 position を占めるようになった。こうしたなかで明治座の登場は象徴的であった。日本人の設計による劇場であったにせよ、ここにはハイブリッド化された世界が形成されていた。昭和10年代の京城では新しくもたらされたモダンな世界が創り出されていたのである。カフェもまたそのモダンな世界の一角に位置していた。

注

1) 第1表の注釈で記したように、朝鮮総督府が最初に公表したカフェや女給の公式統計は昭和10(1935)年3月刊行の『朝鮮総督府統計年報』においてである。昭和10年以前では、警察署の職務には犯罪検挙、銃器の取締などとともに、「諸営業其ノ他」という項目も見られ、そのなかには「銃器商」「古物商」「人力車営業」「下宿屋」などとともに、「貸座敷」「芸妓置屋」「芸妓」「酌婦」「遊芸稼人」も含まれていた。「料理屋」「飲食店」もまた、このカテゴリーのなかに含まれていた。この段階では、カフェは「料理屋」「飲食店」の一部とされていたにすぎない。

ところが昭和10年の段階では、職務上の権限はさらに厳密に細分化され、「警察取締営業其ノ他」という名称で設定され、対象項目も多岐にわたるようになった。「カフェー及バー」「カフェー及バー女給」が新たに追加された。この記載の変化こそ、時代の要請を受けた証拠であり、警察の監視の眼が向くようになったことの表れである。

2) 『京城日報』(昭和6年9月24日)の報道した記事は、おおむね次の7項目からなっていた。

- 1) 営業所内部は白色燈にて容易に新聞を読み得る程度の明るさを保たしめ、凡有色灯の使用は成るべくこれを控へしむること。
- 2) 「ボックス」の一方は広場より見透かし得る様開放せしむること。
- 3) 営業時間は特殊の地域を除くの外夜間午前一時を超えぬこと。
- 4) 女給を雇入れたる場合はその雇書本人に持参せしめ、前職及女給となるの動機、教育程度、前借の有無等詳細聴取し置き取締の参考に資すること。
- 5) 女給の受けたる祝儀は全部本人の所得とし、客の飲食代、器物破損に対する賠償、出銭その他名義の如何を問はず、女給をして金銭上の負債を為さしめざること。
- 6) 女給に衣類の購入を強制せざること。
- 7) 営業中ホールにおいて女給をして「ダンス」及卑猥なる所作を為さしめざること。

引用文献

安鐘和(長沢雅春訳)2013『韓国映画を作った男たち:1905-45年』、東京:青土社。

李端求1929「ソウルの味・ソウルの情調:京城のジャズ」『別乾坤』、昭和4年9月号:32-36。

———1932「実査一年間 大京城暗黒街従軍記」『別乾坤』、昭和7年11月号:34-35。

李英一・佐藤忠男1990『韓国映画入門』、東京:凱風社。

伊藤清1933「京都府に於ける社交ダンスの取締に就て」『警察協会雑誌』、398号:15-20。

稲川正一1939『TYOSEN 朝鮮案内』、東京:朝鮮総督府鉄道局・日本旅行協会朝鮮支部。

エッカート、K. J. (小谷まさ代訳)2004『日本帝国の申し子』、東京:草思社。

岡良助1915『京城繁昌記』、京城:博文社。

梶山季之1969『京城昭和十一年』、東京:桃源社。

金振松(安岡明子、川村亜子訳)2005『ソウルにダンスホールを:1930年代朝鮮の文化』、東京:法政大学出版会。

黒田省三「朝鮮映画雑感」『映画評論』、1941年7月号。

下川正晴2019『日本統治下の朝鮮シネマ群像:戦争と近代の同時代史』、福岡:弦書房。

———2020『ボン・ジュノ:韓国映画の怪物』、東京:毎日新聞出版。

申明直(岸井紀子、吉田富建訳)2005『幻想と絶望:漫文漫画で読み解く日本統治時代の京城』、東京:

- 東洋経済新報社。
- 角南浩 1983 「化粧品広告の四天王（上）：平尾賛平と福原信三」、『広告』 24-2: 42-47。
- 徐智瑛〈姜信子・高橋梓訳〉 2016 『京城のモダンガール：消費、労働、女性から見た植民地近代』、東京：みすず書房。
- 崔吉城 1996 『韓国民俗への招待』、東京：風響社。
- 2018 『植民地朝鮮：映像が語る』、下関：東亜大学東アジア文化研究所。
- 鄭鐘賢（渡辺直紀訳） 2021 『帝国大学の朝鮮人：大韓民国エリートの起源』、東京：慶応義塾大学出版会。
- 鄭琮樞（野崎充彦・加藤知恵訳） 2017 『韓国映画 100 年史：その誕生からグローバル展開まで』、東京：明石書店。
- 時実象平 1943 「朝鮮の映画館」、『映画旬報』 87 号：51-53。
- 朝鮮警察協会編 1934 『警務彙報』、昭和 9 年 10 月号、京城：朝鮮警察協会。
- 朝鮮総督府警務局編 1936 『朝鮮総督府概要』、京城：朝鮮総督府警務局。
- 白恵俊 2006 「1930 年代植民地都市京城の“モダン”文化」『文教学院短期大学紀要』 5: 329-344。
- 平尾賛平（二代目） 1931 「その頃を語る」『広告界』 8-1: 10-12。
- 平尾太郎 1929 『平尾賛平商店五十年史』、東京：平尾賛平商店。
- 毛利元良 1936 『京城情緒』、京城：京城観光協会。
- 梁仁實 2022 『朝鮮映画の時代：帝国日本が創造した植民地表象』、東京：法政大学出版局。
- 山路勝彦 2020 「美人座物語：近代日本のカフェ文化（1）」『関西学院大学社会学部紀要』、135: 21-56。
- 2021a 「女給が輝いていた昭和：近代日本のカフェ文化（2）」『関西学院大学社会学部紀要』、136: 29-53。
- 2021b 「昭和の台湾（1）、洋装とファッション：近代日本のカフェ文化（3）」『関西学院大学社会学部紀要』、137: 29-57。
- 2022a 「昭和の台湾（2）- 近代化と植民地、消費文化と歓楽街の生成：近代日本のカフェ文化（4）」『関西学院大学社会学部紀要』、138: 37-79。
- 2022b 「満洲の歓楽街 - エロスと規律権力：近代日本のカフェ文化（5）」『関西学院大学社会学部紀要』、139: 43-73。
- 無署名 a 1939 「映画都市通信」『日本映画』、1939 年 5 月 1 日号：126-129。
- 無署名 b 1939 「地方通信 京城府」『キネマ旬報』、687 号、1939 年 7 月 21 日号：97。
- 無署名 c 1932 「南山荘サロン・アリラン」、『朝鮮と建築』、10-11（挿絵）。

Colonial Korea in the 1930s: The History of an Iconic Café in Modern Japan (6)

Katsuhiko YAMAJI

ABSTRACT

Korean society had been intensely influenced by accepting the modernization of Japanese culture in the Showa era, especially during the thirties of the 20th century. Modern girls, for example, appeared on the streets of Seoul wearing western fashion, styling their hair, or applying Japanese cosmetics.

Many cosmetic companies always propagandized their products, advocating to reform the traditional daily life to a modern and fashionable style.

During that era, the modernized style of a café was popular in amusement streets, where many guests enjoyed drinking and eating, performing a social dance with waitpersons. This modern style of café was similar to those found in Japan and Taiwan.

Simultaneously, some people petitioned the government requesting to carry on dancing as a business in dance halls. However, the Japanese colonial government forced the closure of dance halls because social dance was considered immoral according to the traditional Confucius dogma.

This paper describes some aspects of amusement in Korea under the Japanese colonial government.

Key Words: modernism, Colonial Korea, Hollywood movies, cosmetics, social dance, café